

シシヤモ魚のこゝろ

谷口定利

その昔、川一杯に浜つてゐた鮭が全然姿を見せずア
イヌ達は餓死寸前に追いつめられたことがあつた。氣
の毒に思はれた神様はその姿を柳の葉に似せた小魚を
川に浜らせになつた。彼等は喜んでこれを食べし、シシ
ユハモと名付けその冬を無事に越すことが出来たと云
う。「シシユ」は柳の葉、「ハモ」は魚を意味する。
シシヤモの源語はシシユハモである。

毎年十一月二十日前後になると本道の幾つかの河川
ではシシヤモの浜上で賑はつて来る。尾幌川、釧路川、

昭和 年度	漁獲高 (尾)	昭和 年度	漁獲高 (尾)
一一二	七七、四〇	二〇	三三、四六四
一一三	?	二一	一〇、四九八
一一四	八〇、二〇	二二	五六、三〇〇
一一五	一八、七〇	二三	四〇、五〇〇
一一六	三、九五	二四	一七、五五〇
一一七	六、五三	二五	二六、〇〇〇
一一八	四六、五四	二六	二〇、〇〇〇
一一九	三三、五四	平均	六六、九五

十勝、大津川、及び鶴
川、沙流川などがそれ
で、この外茶路川、庶
路川、阿寒川等にも浜
上が見受けられる。
昨年十一月、毎年繼
續事業である大津漁業
協同組合實施のシシヤ
モ魚増殖事業に採卵指

導員として現地に出張し、二、三参考資料を得たので
此處にその概略を記して見たい。

シシヤモは、十勝及大津川の場合十一月に入つて浜
上を開始される。本格的浜上は二十二、三日頃でその
期間わずか四、五日間に過ぎず遅くとも十一月末には
殆んど浜上を認めない程度になる。大津漁業協同組合
集計に依る十勝及び大津川兩川に於けるシシヤモの水
揚高は上表の通りである。

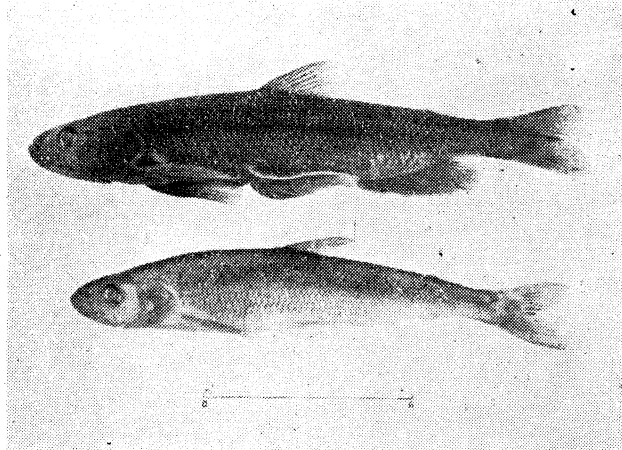
これに對して採卵成績は次表の通りである。(孵化
場實施資料)

昭和 年度	使用親魚數(尾)		採卵數 (万粒)	備考
	♀	♂		
一一一	六、二〇〇	九、八〇〇	一六、〇〇〇	二〇〇
一一二	二二、二六三	二二、六三五	三三、八九八	一五、二〇〇
一一三	三、二五〇	三、四五〇	五三、七〇〇	一、五九二
一一四	一、三八〇〇	九、二〇〇	三三、〇〇〇	八、二〇〇
一一五	四〇、二七五	二六、八五〇	六七、二二五	二〇、五四〇
一一六	六、二〇〇	一四、二〇〇	三〇、四〇〇	三、七〇〇
一一七	八、六〇〇	一七、二八〇	二五、八八〇	四、三〇〇
一一八	一、三三〇	一、三六〇	二、五九〇	四、四三
一一九				採卵實施せず

採卵は大津川（長白）、十勝川（十勝太）の二ヶ所
 （二十四年度以降は長白のみ）にて行はれ全部搾出法に

の棕櫚皮張り孵化盆に附着させ十枚宛結束して、河中
 に收容する。孵化盆一枚 約八五、〇〇〇粒附着する。

より實施してゐる。捕獲された
 親魚は直ちに採別の上採卵に使
 用される。一般に雄の成熟が遅
 く得られる精液量が極めて少い
 爲、雌雄比は殆んど同數近く場
 合によつては雌より雄を多く必
 要とする。僅か四、五日間で産
 卵盛期を終えるこの種にとつて
 かくの如く雌と雄との生殖素に
 成熟度の開きを有することは注
 目に値する。成熟せる卵子はそ
 の殆んどを搾出す事が出来る
 が、壓迫過度に依る卵子に及ぼ
 す悪影響防止等の見地より採卵
 に際しては頭部より壓降し腹鰭
 部位にて止める様にしてゐる。



シヤマモ魚の卵子は半透明で球
 状を呈し、直徑一、〇耗乃至一、
 一耗、卵黄には多數の油球が存
 在する。粘着性は至つて弱く容
 易に脱落する。附着は一部卵膜
 の反轉によつて行はれるのでは
 ないかと考へられる。卵巢は左
 右二箇あるが左が著るしく大き
 く（六五一、五粒）右がこれに
 比し小さい（一、七三五粒）。一
 部供試卵に依る受精率は八二、
 一%を得た。普通八〇%以上は
 受精するものと考へる。

以上の方法に依つての採卵可能
 卵數を平均三、六〇〇粒として
 ゐる。これは雌一尾平均孕卵數八・五〇〇粒の約四五
 %に相當する。受精されたる卵子は縦三五種横二〇種

も經ずして結氷を見る爲に完全なる資料が得られない
 が諸般の事狀から推察して孵出には三ヶ月以上を要す
 河川に收容された卵子は水温
 攝氏一乃至二度と云う低温下に
 於て發生を進める。發眼期及び
 孵出期、孵化率については孵化
 器設置河川の表水が設置後幾日

るものであらうと考へる。本年度受精卵子を支場孵化槽に於て飼育試験を行つたが水生菌發生による死卵續出の爲失敗に終りその経過を観察することが出来得なかつた。次年度に於ては人工飼育試験を進めると共に孵化器設置箇所に於ける發生状態の調査を實施究明したいと思ふ。

シヤマモ魚の天然産卵床については釧路川に於てその場所及び産卵の状態が確認されたと聞く。大津、十勝川に於ては河口より約七軒上流前記兩川の分岐する二股地域及び愛牛附近に在ると云うが未だ確認されてゐない。本年は水が少い爲比較的下流の長臼附近の河底(小砂礫質)に天然産卵することも考へられたので棕櫚皮を結束して沈下し着卵の可否を試みたが認めることが出来なかつた。シヤマモは何れの河川でもその浜上距離が三里程度に限られてゐる様である。この様に限られた浜上區域に於てのみ産卵を行うことは何か親魚又は卵子の發生、稚魚の浮游發生等に制約される或因子イオン、比重等一の影響によるものではないかとも想像される。支場孵化槽内での飼育が結果として不良に終つたのには細菌、水温等の影響の外に案外河口からの距離が大きく影響してゐたのではなからうか。

シヤマモの源語はアイヌ語でシシユハモと云ふことは前述した。漢字では柳葉魚と書かれる。魚体は莖狀を呈し短少で色彩も全く柳の莖色に類似する。沿岸來游の頃、魚体は淡黄色を呈し光澤を有する。成熟せる雄は第二次性徴を体色に表はし著るしく黒色化すると共に體側には雄に特有の無色透明なる液体を以つて満たされる寒天狀横帯の隆起が縦走する。これが如何なる働きを有するかは不明である。雄雌共に頭部に多い追星を顯はして來ることは金魚、鯉鮒と同様である。雄と雌とでは前述體色、寒天狀隆起の有無と更に雄は雌に比し臀鰭及び尾鰭が著るしく大きく、且つ暗褐色を呈する事で一見して判別が容易である。

雄は雌に比し體重、體長共に大きい。總數二五四尾について測定せる結果は次表の通りである。

性別	平均 値 (糧)				測定數 (尾)
	全長	體長	頭長	體高	
♂	一四、三	一二、三	二、八	二、三	二五
♀	一五、六	一三、七	三、三	二、六	二二

測定各部位に於ける最大及最値小は次表の如くなる。

性別	全長 cm	體長 cm	頭長 cm	體高 cm	體重 g
♂	17.0	12.1	14.5	10.1	3.2
♀	18.1	13.6	15.7	11.8	3.5

シシャモ魚には鮭鱒屬特有のあぶらびれを認める。従つて鮭鱒の如く母川洄歸の事も事實であらうと思はれる、シシャモ魚は二年にして母川に洄歸すると云はれるが魚鱗を檢べて見ても所謂冬帯と稱する部分の形成が明瞭でないから鱗のみでは二年洄歸性とは斷定出來かねるであらう。此處で問題になるのは浜上産卵を終えた親魚は海に降るがこれが所謂ホツチャリとして斃死するものか、或は翌年再び親魚として産卵の爲河川に浜上するものであるかと云ふことである。或漁協組長は浜上産卵期の過ぎた十二月初旬頃沖合の手繰網（主として大チカ漁）には多くのシシャモが乗網する。肌は黒く卵精巢共に衰少し魚体は不活潑なる游泳をしてゐる、これは明かに浜上産卵後降海したるシシャモである。然し時日を経るにつれこの魚體は次第に黒色を消し元の姿即ち浜上前沿岸にて見られる如き銀白色となり腹部も膨脹し全く本來の姿に戻つて仕舞ふ。この頃を大チカと稱しシシャモの成長したるものとして漁獲してゐる。又斃死したホツチャリの海岸に打寄せられたのを未だかつて一度も見聞したことが無い。よつてシシャモは産卵後決して斃死するものではなく大チカとして再び生長を始めるのだと云う。その眞偽につき私は確認をした譯でないから何んとも云へない。

しかしながら浜上群の体長が略々一定してゐること、鱗相にも大きな生長的相違（輪紋數等）の認められない事、卵精巢を見るに前年度産卵したる痕跡あるものに接しないこと（吸収し盡さることがあるがニジマスに於ては明かに前年生殖素の痕跡が認められる）及び大チカと稱するものの體長程あるシシャモの認められない事等より考へやはり浜上産卵後は漂流降海し斃死するものであらうと思つてゐる。このことについては今後更に究明し資料の裏付けある説明を爲したいと考へてゐる。

大津川、十勝川の場合、昭和二十年以前ではシシャモ魚の建場も二十ヶ統以内であつた、これが本年では一躍四十六ヶ統に増加してゐる。加うるに機械船の發達に依る沿岸進出も著るしく増加して來た、この儘で行けば凡らく該河川に於けるシシャモはその姿さえ見せなくなるであらう。神だのみは昔遠いアイヌの傳説としてこそ意味も付けられよう。資源は科學的に維持増殖されると共にこれにあづかる關係者の心からの認識と努力とが必要である。

天然産卵床保護の立場から生まれる禁漁區の設置、漁獲の制限と調整及び本種資源についての一般に對する啓蒙と宣傳等々これらの施策と相俟つて未だ多くの未解決分野を残すシシャモ魚について調査研究を進める事はシシャモに限らず水産資源維持増進上の共通なる一課題であると思ふものである。